

## 日審への祈り

南神崎を歩く

市内の伝統行事では、実施する人たちの高齢化やコロナ禍を経て取りやめになったものもある中、安産・子育てを祈願する「子安講」などは今なお継続している地域や集落もあります。

市域では江戸時代以前から北部に日蓮宗寺院が分布し、中央部から南部地域には真言宗と天台宗が多く、安産・子育て信仰などにも宗派による違いが見られます。

真言宗寺院の境内や墓地、路傍には「十九夜塔」や小川のそばで死産者をお供養する「流れ灌頂かんじょう」のため「女人講にょじんこう」がまつた如意輪観音像の石造仏が多く見られ、現在でも塔婆が立てられているところもあります。

日蓮宗寺院では安産・子育て信仰の対象として「鬼子母神おにごぼじん」や「七面天女しちめんてんじょ」



日審供養塔

などが挙げられ、珍しいものでは南神崎・常教寺境内の「日審供養塔にっしんこうじょうた」があります。

市内で1カ所、ここだけにあるこの塔は1828年に、同寺36世日仁にっじんの代「当村(南神崎村)の女講中」が願主となり造立しました。

塔正面に刻まれた日審については『日蓮宗事典』などによると、京都生まれで飯高檀林などに学び、江戸時代初期に全国で布教活動など重要な役割を果たした僧侶とされます。出生については母が出産前に亡くなり、かめの中で生まれたとの伝承があり、「壺日審」「子安日審」とも称されたとされ、塔側面に日審の功績とともに「若者懐妊は安樂福あんらくふく子を産む」と刻まれ、これが安産・子育て信仰につながっています。

江戸時代の南神崎村は1845年の家数が21軒で、当時としては比較的小規模な村ながら1人の旗本による安定した支配が250年ほど続いたよう

で、男性は「題目講中」、女性は「日審講中」などの信仰活動が継続されたと推測されます。

3月春彼岸には、今年も「日審供養塔」に塔婆を立てられることでしょう。

(市文化財審議会委員・

依知川雅一)

関秘書課広報広聴班

☎73・0080